

「メキシコ チャパラだより」 335号

島田正治

きのう十二月十七日、満七十二歳を迎えた。六十歳代とちがって、七十代になったということに何か意味があるような気がする。満六十歳はつまり還暦、人生のひとつの節目でもある。会社でも停年はとか定年とかで仕事をやめてしまわなければならない。余儀なくされる。しかし、現在の六十歳といえばまだまだ若い、もっともっと働ける。還暦を祝うのも、その昔、人生五十年などといっていたころに由来するものでもあろう。七十歳は古稀、古来稀なりとも。わたしは現代流にこれを十年ずらしてずらして考えても決しておかしくない、そのほうがぴったりくると思ったりするのである。

さて、それで七十歳をすぎたわたしが今の心境はと問われれば、仕事はまだまだ、これからと言いたい。それは体と心がそう教える。七十歳になって老人になってしまったと思っははいけない。しかし、人間は、所詮生きものゆえ、いつどこでどうなるかは一瞬先もわかったものでない。運命というか、寿命にゆだねるより法はなからう。このメキシコに住んでいても、みんなのんびり生きているから長生きできるだろうと思っていると、意外とそうでもない。ついこのあいだまで道で会っていつもあいさつしていた六十代の男性がぽっくり亡くなってしまった。聞くと心臓病だった。また癌の病も多い。メキシコはカトリックの国なので死するとみな天国へ行くことができるから一時は悲しむが、あとはさっぱりして「仕方ないね」で済ませているむきがある。いずれにしても、いつかは死という問題に出くわすことになるだろうが、さて、それがいつ、どこでか誰にもわかったことでない。なりゆきにまかせる。

----------*-----*-----*-----*

十二月二日、家内がひと足先きに日本に戻った。メキシコ市からバンクーバー経由の成田行直行便が出ているのでそれを利用した。わたしは二、三用事をすませてまたチャパラへ帰ってきた。用事というのは、今、メキシコ市で毎月発行されている「メキシコシティ情報誌」プラサPLAZA」へ掲載の原稿の渡しであった。今、筆一本絵と文で綴る「絵で旅するメヒコ」が連載中で、この情報誌のトップの表紙に毎号飾ってもらっている。プラサの顔にしたいというのが編集部の意向で、わたしにとってもたいへんよろこばしいことでもあった。もうよろしいと断られるまで続けますからねと言ってある。

----------*-----*-----*-----*